



全傳 勇婦

繪本更科草紙

三編 卷之一

八女式番
五冊
先文堂

八遠
977
11



三編 全五冊

更科子紙

栗杖亭鬼卵著

一峰齋馬圓画

序

信之相木氏夫妻。實為山中鹿介父若
好。蓋有此父母而後有鹿介。世人唯傳
稱鹿介武勇而莫知其所出之絕倫者。
夏顯晦有幸不幸也。前歲遠人鬼印容
遊浪華。寓居之。記其所聽事蹟。錄且
盡矣。乃使画工馬圓加圖像以成冊。題曰

木齋

門遠 13
號 977
卷 11

世 11
11
11

更科草子。更科其婦名。題以此者。殊稱
其艷惡而勇力身。請余冠一言。余謂人
心固有四端。而不知充之。以如聖教何
哉。是故苟可數四端以導善。則雖擇官
小說。亦足以助教邪。况斯編所記。壯士
烈婦。實希世之仇麗。而志必忠。操必貞。子
載之下。令人心感動。砥礪焉。且以如鹿介
武勇有由出也。然言不文。以不足述事。辭
不巧。則不足達意。是作者之所竭力已。
若夫近世俗間所行。談士之雜記。怪力亂
神。聖人所不語。奇事異聞。伸寸刀尺。其
勢詭譎。虛飾失實。則為斯編者之所不取
也。梓而行諸世。何不可之有。

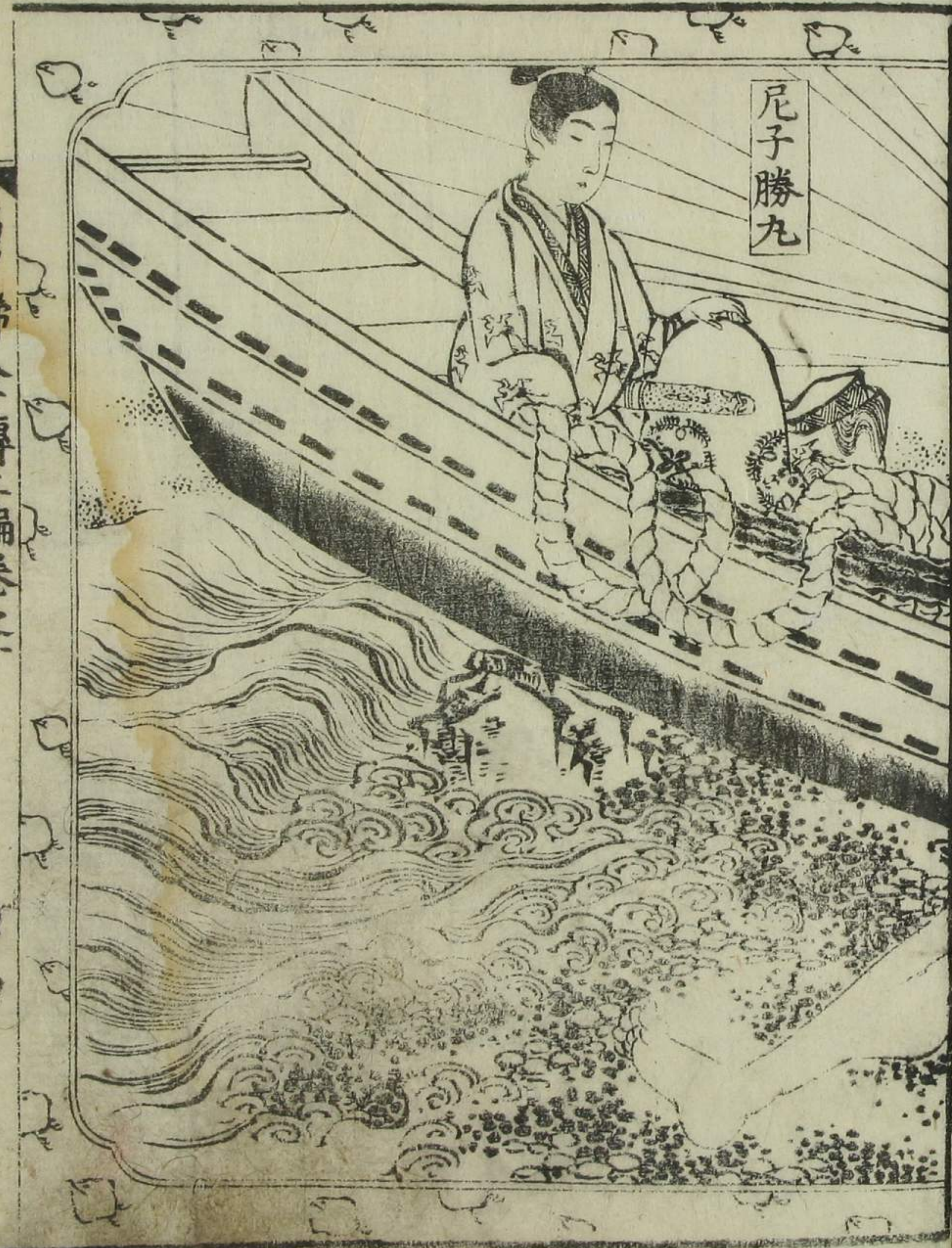
文化甲戌孟夏

葛波山人



五月早苗之助





尼子勝九



力者徳藏後
荒浪碇之助

白綾姫



數中次之助



丹波太郎

勇婦全傳三編卷二

四八五

勇婦全傳三編卷二

四八五



寺元生死之助

盲人徳市



尼子九郎光門

兆典司

浮舟

更科艸紙三篇摠目

卷之一

- 山中鹿之助三年の山とす話
- 毛利元就尼子九郎左門を謀る話
- 尼子九郎左門英雄と毒殺する話
- 尼子九郎左門叛逆義父毛利へ囚へ成話
- 五月早苗之助幼主を救ふ八重姫節死の話

卷之二

- 兆典司勝九と助る話
- 九重姫熱湯と浴く貞と守る話
- 寺元生死之助浮舟と助る話
- 浮舟危難藪中茨之助の傳
- 早川鮎之助龍宮城に至る話
- 相本森之助夫婦古猪之助の凶示と話
- 九重姫危難丹波太郎の傳

卷之三

- 山中鹿之助夫婦有馬温泉に浴する話
- 山中鹿之助松永彈正が奴と成る話

卷之四

- 浮舟再び傾城と成横道兵庫之助蘇生の話
- 鹿之助銀閣寺に雷獸を捕る話
- 兆典司の名画白綾姫の魂を動かす話
- 尼子忠臣の鞆都に會する話
- 早川鮎之助竜宮より帰る荒浪碓之助の傳

卷之五

- 上月の城に乗取尼子九郎左門を生捕る話
- 尼子義父再び富田の城に入勝久諸士に恩賞をうへ話

摠目畢

勇婦全傳

繪本更科草紙三編卷之一

遠州小夜中山麓栗杖亭鬼卯著

山中鹿之助三年の山と知る話

尚書曰吉山不替在人惟天降災祥在天

うや爰る雲伯隱因石作藝三備播十一州の

大守雲州富田小居城の尼子晴久ハ永祿三

年十二月廿四日病死のまゝ其子式部太捕義久

其家と緬といへも年少く武勇小長せしハ毛利

元就の爲小追せバりし播州上月の城小藝し

ありしハ山中鹿之助と得し其勢龍の雲城

得しハ如く追し他国と切随へ旧城雲州富田

造^{ぞう} 營^{えい}して八重^{やえ} 姫^{ひめ} 勝^{かつ} 丸^{まる} 猪^{いの} も移^{うつ} りて山中^{やまなか} 鹿^{しか} 之^の 助^{すけ}
ハ上月^{うづつぎ} の城^{しろ} 代^{しろしろ} とりて播^は 州^{しゅう} にしむりて其^{その} 先^{せん} 晴^{はる} 久^{ひさ} の世^よ 小^こ 武^ぶ 勇^{ゆう} 絶^つ 倫^{りん} の武^ぶ 士^し 小^こ
下^{しも} 野^の 守^{のり} といへるハ其^{その} 先^{せん} 晴^{はる} 久^{ひさ} の世^よ 小^こ 武^ぶ 勇^{ゆう} 絶^つ 倫^{りん} の武^ぶ 士^し 小^こ
て戦^{せん} 功^{こう} 屢^る ありて其^{その} 子^こ 九^く 郎^{らう} 左^さ 工^{こう} 門^{もん} 父^ふ の跡^{あと} と儲^{たくわ} く
殊^{こと} 小^こ 尼^に 子^こ の一^{いつ} 族^{ぞく} ありて重^{おも} く用^{もち} ひむべし其^{その} 心^{こころ} 奸^{かん} 佞^{ねい}
小^こ 欲^{よく} の士^し ありて大^{だい} 義^ぎ 久^{ひさ} も強^{つよ} く用^{もち} ひむべし
近^{ちか} 頃^{ころ} 山^{やま} 中^{なか} 鹿^{しか} 之^の 助^{すけ} と得^え ぬより九^く 郎^{らう} 左^さ 工^{こう} 門^{もん} 父^ふ の跡^{あと} と儲^{たくわ} く
新^{しん} 泰^{たい} の鹿^{しか} 之^の 助^{すけ} 小^こ 見^み 替^か へしを恨^{うら} みて何^{なに} 卒^{そつ} して
鹿^{しか} 之^の 助^{すけ} と亡^な び再^{また} び權^{けん} と取^と りぬめと昼^{ひる} 夜^よ 此^{こゝ} 事^{こと} のそ
心^{こころ} 小^こ 忘^{わす} れる事^{こと} 上月^{うづつぎ} の城^{しろ} 小^こ 山^{やま} 中^{なか} 鹿^{しか} 之^の 助^{すけ} ありて

民^{たみ} と撫^な 育^{よく} 諸^{しよ} 士^し と懐^{なつ} けし大^{だい} 治^ち り暫^{しば} く戦^{せん} もあらず
思^{おも} へ鹿^{しか} 之^の 助^{すけ} 情^{なさけ} 往^{むか} 事^{こと} と思^{おも} へ小^こ 豕^し 幼^こ 少^{せう} より父^ふ 母^ぼ の
恩^{おん} 山^{やま} よりも高^{たか} く海^{うみ} よりも深^{ふか} く天^{あま} 下^か に英^{えい} 名^な とるさぞ人^{ひと} ば
再^{また} び父^ふ 母^ぼ 小^こ 音^ね 信^{しん} へて誓^{ちか} げし國^{くに} と出^で づるもさぞ
一^{いつ} 昔^{むかし} 小^こ 成^{なり} たり今^{いま} 尼^に 子^こ 小^こ 随^ま ひ衰^し へたる家^{いへ} と真^{まこと} 一^{いつ}
再^{また} び雲^{うん} 州^{しゅう} 富^ふ 田^{でん} の城^{しろ} 主^{しゅ} 小^こ 治^ち りて皆^{みな} 豕^し 方^{かた} 寸^{すん} たり
出^で づれば豕^し 小^こ 於^お けり事^{こと} 足^{たり} たりとつづき此^{こゝ} 事^{こと} 信^{しん} 州^{しゅう} 小^こ
たつれ父^ふ 母^ぼ 小^こ まうして告^つ ぐと思^{おも} へど戦^{せん} 國^{こく} の習^な ひ豕^し
此^{こゝ} 城^{しろ} と出^で づると関^{せき} 巴^は 藝^ぎ 州^{しゅう} より責^{せき} 来^き らん如何^{いか} せん
常^{とこ} 小^こ 九^く 重^{じゆう} 姫^{ひめ} とそののぐと大^{だい} 谷^{たに} 古^こ 猪^{いの} 之^の 助^{すけ} 側^{かた} 一^{いつ}
りり鹿^{しか} 之^の 助^{すけ} が孝^{こう} 心^{しん} と感^{かん} ずるも出^{いで} て言^{こと} 々^々 あり



山中鹿之助
三年の凶と
悟坎

勇辨全傳三編卷之二

E



山中鹿之助

九重姫

勇辨全傳三編卷之二

かりたるハ只事なればと其翌月いつもの如く祭りて
 空と云れハ珠ふりくくと三日月あり今ハ鹿之助
 奇異の思ひとなり我若年より三日月と信一甲の
 前立中も三日月となりと事普く人の知る所也三箇月
 間我眼ふ月と云は四月目に初三日月と拜ひ是
 我身ふ三年の凶なり人事と月天子のまゝと云ふ
 なり人慎ても慎どもハ何るべうと夫より病と称
 して他国へ出たりと云

毛利元就尼子九郎左エ門と計る話

爰ふ藝州の大守毛利元就ハ再び雲州富田の城と義久
 小取返され一事と本意なき思ひいたも義久と

倒人と思ふと山中鹿之助ありて智ハ蜀の諸葛亮勇
 ハ宋の岳飛中も増り一勇士なれば中々容易の謀ハ
 及ぶと云ふも何れハ空一光陰を過と知小尼子
 九郎左エ門が近頃義久小用ひて計る計り
 暮らると聞出屈竟の時節なりと日頃側小
 召仕ハ徳市より盲人琵琶箏と能く云州へ遣
 盲人に謀と授け金銀多く持て雲州へ遣
 今尼子九郎左エ門ハ世と味気無思ひ引籠りて
 のりりく一堵国修行の琵琶法師来りたりと
 通じられハ幸の更なりと呼入平家てよとのと
 結らむ今誠ハ妙音やて感ふ絶たれハ暫留置

昼夜琵琶の弾々々々楽々々々或時徳市人等と
 窺ひ九郎左エ門小言々々尊公尼子の一族としていふ
 引籠り濛々として暮るるぞ家近頃君の厚
 情あつた此所小苗り恩身に余れば心の憂も絡玉を
 目もそ不自由れ力もなかりやと世に頼
 言々小九郎左エ門沈吟してありや心小黙頭声と
 低々していつらく汝家胸中と察して実と述べ事祝着
 たり汝が如く父下野守ハ度々の軍小勇名と頭ハ
 今の義父が異母の叔父なりしが我小いりて山中鹿
 之助小見替らる心外胸小せゆりて暮せども彼鹿之助
 中々容易の輩にあらざれば施さる謀もさく只胸と

暮るるつて暮るるつと大やうなる吐息と納めれば
 徳市猶も摺寄る君臣と見る夏土埃のどくどく
 臣君と見る事復雙言の如くとも兼る義久公親疎と
 兵一ど新参の鹿之助と愛一かよの国の古ふと前表
 有り君早く心と定る義久と倒して此国と取りむ
 九郎左エ門又曰我も義久の難面と恨といふも鹿之助
 何んや如何も事なりか徳市又曰
 鹿之助ハ毒殺小何んぞん除がう君かこの謀と
 なりや鹿之助と除と叫々れば九郎左エ門横手
 と折妙計成哉と志す鹿之助と殺といふも
 早川麩之助横道兵庫之助いづれも万夫不當の士殊に

鹿之助大恩あれバ毒殺の事ありけれ々バいづく家と恨
 ずん徳市笑て曰夫してい安事なり姜將軍一計
 三賢と殺せし謀ありと又叫多れば九郎左門いよく警
 うりゆりゆり身ハ如何する人ぞ智謀兼備の盲人九人に
 何と名と明しむへと尋きバ徳市猶も声とひそめ
 何と隠さん豕ハ毛利元就の近臣なり此身毛利
 合鉢して義久と亡しむる雲州富田の城主と
 雲伯ニケ国と分與んとの直書有し懐中より取り
 出し見せしれば九郎左門大に悦び我も久しく毛利
 下らんと思へども手筋もろくは殊し鹿之助家中と
 いへども忍術の者とし出し置心よ任せざりし小元就

我と人と思召して汝と枕客とれし事ふして返くも
 満足より汝が謀と用ゆり時ハ十ガ九ツ謀負をべし
 夫より九郎左門出勤し義久の山前より出立し
 鬱勞の症より引籠りいひし近頃都方より琵琶
 法師と得し平家と語らせし妙音あり疾
 追日平愈仕に滅し奇代の名人より座のり
 御前ふ召出され一曲のこころやと伺多しバ義久公も
 悦むい久しく軍務を取終は雅音と聞む急ぎ召出せし
 仰事ありきふぞ早速召出され平家と始り
 滅や奇代の妙音なれば上下ねりて感入らば
 是より徳市と城中ふ留置しハ重姫勝丸の山相手に

盲人徳市謀
勇士を主母殺す

山中鹿之助

鮎之助

兵庫之助

生死之助

盲人徳市

勇婦全傳三編卷之二

勇婦全傳三編卷之二



源氏物語

昼夜も側と離まじりしより無類の女子なれば此人
かゝていと義久の心ならず叶ひしれは九郎左衛門ハ仕濟
たりし心中闇らず悦ふ哉

尼子九郎左衛門三人の英雄と毒殺する話

或日九郎左衛門義久の前より出く近頃兼る山中鹿之助病
氣あり引籠り有之より彼ハ當家柱石の臣ふて追
旧領と取返し君と元の十一州の大守ふが人もの
鹿之助ふが彼が病も軍支ふ心とゆゞ少学醫の忘と
存じれば徳市と差越えれ妙音と聞くなば早速平
愈もあらんうと忠臣頼ふ述べれば義久悦むし汝が
中を如く鹿之助一日かゝるんば此城一日危うらん心と

慰るす徳市と遣はん城に良薬と與へん勝らん
悦びしれハ八重姫も徳市が妙音と九重姫も尚也
思ふ能も心附く悦むわづ義久寺元
半四郎と使者とて鹿之助が病氣と訊徳市
秘曲と聞べき旨と述べれば傍ふ早川點之助
勸出某久し鹿之助小對面つゞ殊小病氣の
下るべし願ふれば義久點頭ゆひ衣の願ふ
汝も半四郎諸も上月に立越鹿之助快気次第
當城へ来ると宣ふハ八重姫も兩人も異
言傳ふし寺元早川の徳市と伴ひ上月より

源氏物語三編卷之二

出行くは旦祝山中鹿之助ハ深き慎りて病と称
 引籠りありくは富田より上使くく寺元
 半四郎早川鮎之助徳市と伴ひ来れば出ひし
 上使の趣と伺り義久公山中が病氣と深く察し
 ぬし盲人徳市の琵琶の妙手れば心と慰る為年
 遣はくらのよければ鹿之助僅く絃を數おぬ
 某の心頭よりけらきし心懇命と蒙る事難有
 仕合と鮎之助も疎遠の情と迷くは早川も鹿
 之助が病氣如何と素く存の外壯く
 ありければ大い安堵し九重姫も八重姫勝丸の
 傳言と述べ横道兵庫之助も呼出く互に

往事と語り合ふ鹿之助いつら特今酷暑乃
 頃なれば某の別業西海のほりあり久く
 禁足して何方にも不出といふも寺元氏の子
 弋くの忠臣早川横道の某が莫逆の友一人も
 盲人をれば憐る事るいさや明日は彼別業て
 暑と避るの宴さんいふも各詞と揃減ふ
 生く日と同く事と願はれ同日は死人事と
 願ふ三人おれ一日別くは時ハ千秋の思ふ
 両君ふまゆゆ事鮎之助が悦何ぞ是ふきん明日の
 雅會ハ桃園の樂とあんと約くは徳市も西海
 の別業ハ誠ふ絶景と羨り見ぬ目も羨り

一日の願ねがひとさんと存ぞんくらくら幸さいの詞ことば悦よろこへいと
 約やくして其日そのひと待まちくはかくて其日そのひふもつうふ
 海邊うみべの別業べつごふ庭にわ一潮いちしほの入い檻かぎあり白浪しろなみ檻かぎと浸ひを
 有ある由よし納涼なすらうの佳興ききよう此上このかみや何なにんと各おの盃さかづきと廻めぐり
 興きよう園えんふぞ及およびくら徳市とくいちへ兼かねく計しりり一ひと毒茶どくちやと懐中くわいちゆう
 折や何なにと心こころと配くわりく抑おさ此毒茶このどくちやハ熱酒ねつしゆ小投こすむら
 時ときハ即死すなはちしを又冷酒れいしゆ不投すむら時ときハ毒和どくわらふして
 肉く悉しつく碎くだけ只骨ただほねと皮かわとの残りのこり三年さんねんふして死しを
 妙毒めうどくさう此毒茶このどくちやと袂たもと小隠こかく一折いちやと見合みあくらく時とき
 極暑ごくしょの時節ときせふを何なにも冷酒れいしゆふして熱酒ねつしゆふら
 ぶまば毒茶どくちやと鉏あ子こふらけ一ひと空から知しらぬ顔かほと

琵琶ひばと弾ひく居いくらく此時このとき寺元てらもと半四郎はんしやうらうハ元来もとより酒しゆと
 子こと探たづり蓋かきと明あて何なにと捨すり入いれどもかゝる工くの
 後のちふ思おもひ合あひ内うちかくと鹿之助かのみすけと始はじめ三人
 の者ものハ大盃おほさきふ引受ひきうく吞のる暫しばらく何なにりて兵庫ひんぐう之助のみすけ
 めう苦くや一声ひとこゑ叫なび鮎あせ之助のみすけもこの口惜くちやくや毒酒どくしゆ
 言ことふぞ鹿之助かのみすけ仰天おほてんして人ひとの面おもてと見みるは
 紫むらさの色いろとあり七なな蕪う八倒はつたうと有ある様さまこの口惜くちやくと
 立上たちあらんとくらふ足あしきくびあゝ口惜くちやくや鹿之助かのみすけ程ほどの

士が毒殺せしむ人いふにど何者の仕業ぞと何うと
 白眼廻せば寺元半四郎大お驚徳市と取て伏最前
 鈍子の蓋と開き何角捻込ハ正しくみり家
 是と見ちがう心附を柱石の臣と毒殺する事皆
 我罪あり何者小このまれば悪計とやうぞ
 真直ふ白状せよと捻付を徳市ううくと笑し
 我と誰を思ふ毛利元就の近臣あり尼子九郎左門と
 心と合せ汝等と亡らんよの謀首尾能泰で珍重く
 我相圖と待く義久と召人ふせん蕪くの約束是
 見よと火入を探く火と付を相苗の狼烟
 舟人おんと立上れば沖お扣ハ一艘の早船飛が如

聖州きて急ぐ半四郎你蹉跎憎と盲目めが謀せめて
 當の敵各寄く一刀つ恨と鹿之助お突付れハ
 徳市自若くして元就公の目鏡とめりく盲人の
 某と用ひり何ぞ命と惜んや色とも憂でバ
 めりれば鹿之助感心して人へかくそめりたれ
 我不明ふく毒と喰ふ是天家と亡と憐
 至一尼子の運命今日お尽く是の残念之を
 いら眼口より鮮血を走其倦怠くみり
 兵庫之助鮎之助大お怒りせり己と冥途の道
 連ふして吳人と兩人刀と拔徳市とつくと切殺
 半四郎お向つて是下幸ふ毒酒とまぬれり



尾子九郎左門
叛逆之蹟

尾子九郎左門



尾子義久

重姫

寺元生死之助

一時も早く富田の城へ立寄り主人の補佐と頼り入
 此點之助の見苦死骸と跡の残るも是見ぬと
 檻より真さうさまに海庭へ飛入底の水屑と成るは
 無慙といふも余りあり兵庫之助も後下と檻不
 馳登と寺元押とら内室浮舟啞余波おしとん
 亡骸ハせめく内室小葬まると止るうら早事
 切く見へるれば半四郎心附人への殺小時刻延引せ
 一こそ無念なれ早船少く九郎左エ門へ注進せば
 不意ふ起く主人義久公と殺せんハ必定なりと
 あらりと見廻せば鹿之助が乗来し連錢足毛の駿
 足庭前の松ふ繫置くると是幸と打まふり馬ハ

名より逸物乗人ハ達者一鞭うまう乗行し
 勇一りり有様なり

居子九郎左エ門謀叛義久毛利し捕はると成結
 されは居子九郎左エ門毛利し合躰して元就の家臣
 河野四郎通直海賊の張本来島太郎通康など
 以屈竟の勇士と九郎左エ門が食客と置上月の
 住進と待てるふ毛利の勇士浦兵部之丞上月の狼煙
 と見く一番し馳付かくと告ぐれば九郎左エ門すま
 時節くそ来ると河野来島浦の三士と我家僕の
 如く出立せ富田の城へ来ると義久ハかぶる工の有と
 夢よもまりむらび徳市と遣してより鹿之助が音信と

閉び快気せハ兵庫の助鮎之助諸も近々内より
 来らんとハ重姫君と物語わしうら門外駱しく只今
 寺元半四郎何事の出来しやらん早馬ゆく馳来り
 中をよみと追く注進られば傍よりつら九郎左工門
 俄ふ天と仰ぐ大小笑ひおさひとあはれち義久公半四郎が
 早打ハ上月の城ゆく山中鹿之助早川鮎之助横道兵
 庫之助と盲人徳市が謀り毒殺せし知らせしめたる
 心不懸る鹿之助何れぞハ大事と明とさる某尼子
 の一族として救のぞ捨らるし一念骨髄不通り
 兼て毛利元就よ一味して雲伯播の三州と押領
 せんと思へども鹿之助當家おりの間ハ中々大望

思ひも寄らば毛利の近臣ら徳市と呼寄り人々謀
 願り某が近従の武士ら皆毛利家の勇
 士なり夫義久の取巻と声より早く河野來島浦の
 三人小寺と當り身と堅久義久お鉄炮と付
 追取巻ゆ近従の武士も飛道具
 一打と追取巻ゆ近従の武士も飛道具
 香も憫き果くあり久公仰天しお板ハ
 九郎左工門が謀殺ふ大切の鹿之助鮎之助兵庫之助
 毒殺り悪人ともき遠く
 某が不明なり梅るに詮か今日只今尼子の家断
 絶の時来り潔く生害せん指添し手と
 八重姫君より出のし先程より始終ハ

阿侍不の身死しつゝ勝丸の心静め思案
 此跡と見し仰天とれども主人と飛道具とり取巻
 暫主人は筒先とて
 打黙と来れ上月れ女と委し関人と思ふ物
 結りの間平尔はなれ委し結りていふ半四郎
 涙とらひ徳市、妻殺結之助、海底へ飛入
 悪小才れ善小才れ子細と関し上り一味

大小からし扱出見九郎左エ門はくく打黙と汝竜に
 翔河りし義久と手込み上ハい人
 替し無念ニつふい夫より八重姫妹九重姫小
 執心とれども主人の女房鹿之助、妻は思ふ
 叶い義久と倒し鹿之助と殺し二人の女は手
 小入ると日頃の念願昔摺の曹操、吳小入る大
 高小高の兄弟と妻と
 志し家等小似り八重姫と本妻これ九重姫
 と妻と人面黙心此九郎左エ門小莊し

口惜多生恥と願ふん清く生害り人と再び
刃と取上るふ成九郎左エ門踏落し汝と殺を時ふ
八重姫我心小随ふ中一義父の生死ハ八重姫の心
小なり夫と声くきこば来島太郎走り終ふ義
久公と高き小幸小いしと多くハ重姫ハ夫の仇思ひ
知く懐刃抜持九郎左エ門一突かくきこば其手とまの
握り汝我小随ふ義父の命と助入難面りもあは
夫義父と木の元へ枯り置一日ふ幸足の指一本
づ切離して苦痛と見し夫と助も殺も汝の心小
あり得し心と静く返谷りしと突入もハ今更手
向ふ事とくりに打伏し致る半四郎ハ寂前

しり黙念してけり多るが両手とくこと打情時
と考へる小天下小英名と震し鹿之助と育
人の手小死し只今も繁栄の主人一時の間小
捕人ともわく皆天運のやと祈りて九恵の及ぶ
所小あり九郎左エ門臣下け列ふ加きいも心
尼子の一族より主家の断絶を成小なり成今日
より寺元半四郎九郎左エ門殿の臣下と成生死
とくも小半四郎ハ義久公の為小死し今日
九郎左エ門殿の臣下小生まき出し心とけり寺元
生死之助と号る尼子の奉公の手始りハ重姫
君と口説深せぬ手小入りしとくも潔く述べ



尼子勝九

五月早苗之助

兆典司



寺九生死之助

八重姫
の為
早苗之助
之助
勝九

九郎左エ門完尔と笑ひ汝豕臣下と成事能時務と
知と言つて金一いっ中り中りて成りも八重姫と手小
入よ吾得心せり時ハ首打く我一見せし其時
そ汝が誠心頭るべしと用捨もわく下緒なき何
八重姫といひしめ幼少あはれも勝九ハ義久ハ嫡子
あはれ根と絶く葉と枯を汚首打り見せ下と
八重姫と引渡す何野四郎九郎左エ門小向い主人
元就某小言合ハ義久と必殺害と事なる
藝州吉田小女居ヤ一ひる時を居子の家来櫻
仇事なる事ハ是萬全の謀もと付一上ハ藝
州一伴ハ人ハ怪ハの張與ハ打乗昇出さハ八重姫ハ

正鉢ハ我も具して行へし生死之助
引苗ハ動り義久公服と備さ天運の傾く所是非
ハ勝九ハいりかアぞ九郎左エ門是迄の情ハ
せめハ命ハ助出家ヤもハ呉よと涙共小出りハ
此日ハいりる日と也永祿十一年林鐘末の八日
五月早苗之助幼主と救ハ八重姫節ハ
死と活
爰ハ五月早苗之助とワ者あり其来由と尋
るハ義久公上月の城小たハ甘一時五月の頃
一両草野面ハ出りハ折節植付の頃

田毎水と入んとて一ツの大石りて田水
 入る葉の波百姓ども此石と取退んと七八人打
 寄く石波動く事いひ持たぬとて居所
 十三四の童来りて各の非力と笑ひいひ心能く
 田へ水と入て参らんと大肌腕ふ成り急いとい
 大石此童の爲ふとい返りて
 水瀾漫と田毎へりり義久公寂前
 此童が躰を覽りて其怪力と称し其
 親をむらひ終り家臣と名と五月早苗之助
 号^{三子}十勇のうい中鹿之助と預りて其友人
 越へ忠臣無二の若者も若君勝丸の側

召仕りける此日か駿動りて十一歳の勝丸君と
 寺元が乗捨し山中足毛に乗せ奉り其身ハ大身
 の鎧引てつらつら引添ひ廣庭小躍り出る
 けり長坂坡あつて趙雲が幼主と救い
 かやいさう九郎左門声とけり勝丸と
 逃る早苗之助ハ若輩も九人あつて百捕
 り高名ヤトといふ早く教多の捕手我ら
 大身の鎧引
 近付者も
 從横し振廻り突廻りわたり
 早苗之助打笑ひもいひ人々獨言
 追手の門押開松原急り九郎左門大

七面八臂ありしも飛道具の中いさゝか兩人とてし
 出らんへし一蜀の甘婦人の趙雲小幼主と頼て
 自害し名を残りし一必し早苗之助頼むと
 懐釵引抜のんど小突立伏りし勝丸君大に驚に
 こゝろやまはり母上我を際へ腹切り父上の言
 甲斐ちく生捕まひし一恥とてかへと思ひに
 情ちや悲しやと押動し一救ふとていさゝか
 息と緇蛇ハ一寸あて其器と得る今の一言あて
 行末そのりきぞや生死之助ハちがしつて我首と
 持九郎左エ門が心し随ハざらゆは是非ちく首切りと
 欺と歎ふまじきよ勝丸ハ危し人事りし
 救ふと名残りしと宣ふもなつ野の蟬もに
 かろしとて残りし鬼と欺く早苗之助も
 大声上り泣きかたつて心付あの人音ハ歎の
 寄来るといふし泣き沈むと勝丸と
 無理小駒といふそのや取旅の僧の十二三の
 見と伴ハ此所と通すかたしと生死之助見ると
 飛つと彼の児の首と水もなまし次打落し旅
 僧ハあつと玉ぎりて何國ともなく逃去りし僧
 いりれるもかぞ後の章と見ると入る

繪本更科草紙三編卷之一終

日本書紀卷之三十一 二十一

